

こんな時、
言い方変えてみませんか。

0からのスタートにならないために°°°

小学校は「教えることだらけ」？

1年生を担当してきたとき、「教えなければならないこと」がたくさんあり、入学してから2週間は、毎日学年で教えなければならないことやルールを確認していた。

しかし、その内容は1年生は初めて出会う内容だったのだろうか。この1年間、幼児教育を学んできた中で、子どもたちは入学までに経験していることや知っていることがたくさんあると感じ、改めて自分の指導をふり返った。

そこで、4月のスタート時に教えるべきだと思っていたことや、学校生活の中のルールをふり返り、幼児期での子どもたちの学びを活かした指導の仕方を提案できないだろうかと考えた。

「1年生は0からのスタートだ」というこれまでの“常識”をリセットし、「知っていることを引き出す」言葉がけを、具体的な場面で考えていった。

学校・教室環境

- ☐ 教室の中に安心スペースを ☐ 廊下にも工夫を
- ☐ 全員で見守る

☐ 教室に安心スペースを

幼児教育施設には、部屋にござが用意してあったり、畳が敷いてあったりする。机は、自分だけの机はなく、グループで1つの机を使っていた。必要のない時は片付けてある。床に座って遊んだり、お絵描きをしたりする姿がたくさん見られた。

今までの床に座って遊んでいた環境から、小学校に入学後の自分の席に座る環境への変化は、児童にとって大きな変化になる。自分の席があることを楽しみにしている反面、環境の変化に対応しきれない姿も見られるのではないかと考える。だから、少しでもリラックスできる環境を作り、安心して学校生活を送ることができるように、教室の後ろの部分にマットを敷き、床に座れるスペースを作ることを提案する。

ある小学校では、教室内の机をコの字型に並べ、真ん中の空いたスペースにマットを敷き、大きな積木やブロックを置き、入学前に楽しんでいた遊びが出来るような環境にされていた。座ると友だちの顔が見える配置は、子どもの安心感につながる環境として取り入れる学校も増えているようだ。

また、幼児教育施設の時に経験したなじみのある遊びやおもちゃなどが教室や廊下にあるだけでも、児童は安心して過ごせるきっかけになると考える。

□ 廊下にも工夫を

幼児教育施設の時に経験したなじみのある遊びやおもちゃがあることで安心して過ごせる環境ができると考えている。さらに、廊下を活用して、小さなテーブルを置き、折り紙を折ることができるスペースを作る、廊下の壁に模造紙を貼り自由に絵や文字などが描けるお絵描きスペースを作ることで、さらに、安心して過ごすことができるのではないかと考える。

「好きな絵や文字を描いていい」ということは伝えるが、どんな絵を描いているかは教師がよく見とっておき、気になる姿があるときには、「人が悲しむことは描かない」などの最低限のルールを伝えることも大切だと思う。

□ 全員で見守る

1年生は、「何もできない子どもたち」ではない。教師は少しでも困っている様子を見かけると、「大丈夫？やってみようね。」と声をかけることが多い。3月までは各園の年長児、リーダーとして中心になって行動していた子どもたち。それが4月になり、「1年生」となるだけで、周りの人たちがやってあげてしまう環境になってしまうのだ。

小学校に入学して分からないことや不安なことがたくさんある児童もいると思われる。しかし、その児童たちが困ったときに、自分で考える前に先読みして、手を差し伸べてしまうと、その児童たちは考える前に答えを出してもらえることになる。それが繰り返されると、考えることをやめてしまうのではないかと考える。

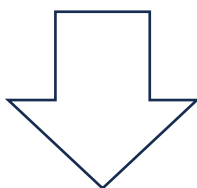
だから、教職員、全校（特に6年生）が共通認識を持ち、「見守る」ことをしていくことで、1年生は、就学前の経験から考え、行動することができる。「考えるスイッチ」を動かし続けることができる児童でいてほしいと思っている。

学校生活のスタート

- | | |
|---|--|
| ☐ 靴箱の使い方 | ☐ トイレの使い方 |
| ☐ 名札の付け方 | ☐ 廊下・階段の歩き方 |
| ☐ 自分の席に座ること | ☐ チャイムの仕組み |
| ☐ 荷物の片付け方
(ロッカー・引き出し) | ☐ 休み時間の過ごし方
(20 分休み・昼休み) |
| ☐ 提出物の出し方 | ☐ プリントの配り方・片付け方 |

□ 靴箱の使い方

靴箱には、自分の名前のシールが貼ってあります。そこに入れましょう。かかとを揃えて、つま先を奥にして入れます。上靴は上の段に、下靴は下の段に入れます。



靴箱には、自分の名前のシールとマークが貼ってあるので、そこに上靴と下靴を考えて入れてね。

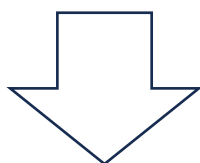
幼児教育施設でも、一人ずつの靴箱に靴を入れている。名前の書かれているシールが貼られている。ただ違うのは、一人ずつのマークが貼られていることだ。

文字が読めない児童がいることへの配慮として、慣れるまでマークシールを使用し、慣れたら、マークを外していく。

どこに入れるのか、どのように入れればいいのかについては、子どもがすでに知っているなので、引き出していく。まずは、「教える」のではなく、「尋ねる」ようにし、これまでの経験からできることを活かしていくように促していく。そして、丁寧に入れることができる児童を認めていく。

□ 名札の付け方

朝、教室へ入ったら、名札を付けます。自分で付けられない人は、先生や6年生にお願いをして、付けてもらいましょう。



朝、教室に入ったら、名札を付けましょう。

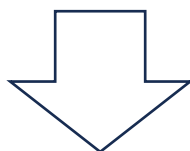
「名札が付けられない」と思っているのは、小学校の教員だけである。幼児教育施設の時から名札はあるし、「自分で付ける」ということも経験している。

しかし、中には名札がなかった施設があるかもしれない。また、針が怖くてなかなかうまく付けられない児童がいることもある。その児童に対しては個別に声をかけ、配慮をする必要がある。

また、名札入れの近くに鏡を置いておくことで、自分で付けられているかを確認することができるといふ工夫がある。

□ 自分の席に座ること

用意ができたら、自分の席に座って待っててね。何をしてもいいよ。



みんなのご用意が終わって揃ったら朝の会始めるね。自分のしたいことをして待っててね。

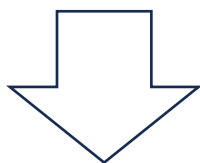
幼児教育施設では、集まるときに自分のいすを持ってきて座る。集まってきた子どもから話をするなど、「じっとして待つ」ということはあまり見られない。

小学校では朝の会が始まる時など、早く用意ができた児童には、「自分の席で座って待っててね。何をしてもいいよ。」と声をかけることがよくある。けれど、実際「何をしてもいいよ。」と言われても、じっと待っているだけの児童が多くいたことを思い出した。それはなぜなのか考えたときに、「座って待っててね。」と声をかけている以上、席から立って移動していいのかが分からずに困っていたのではないかと今なら思う。

小学生になれば、自分の机といすがある。幼稚園児はそのことに憧れて入学してくる。しかし椅子に長時間座り続けることの予想はしていないはずである。なるべく子どもたちが「じっと座って待つ」という環境にならないようにしていくことも大切だ。

□ 荷物の片付け方（ロッカー・引き出し）

ランドセルは、ロッカーに入れます。机の中の引き出しには、左にクーピーやのりを入れて、教科書やノートは右側に入れます。お泊り部屋を作りますよ。



机の中の引き出しに入るように、考えてみてね。

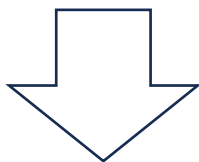
教室の中のスペースは限られているため、ランドセルはロッカーに入れ、コップ袋は机の横のフック、体操服やエプロンは壁側に用意されているフックにかけるなど、学校独自のルールの確認は必要である。写真やイラストで示し、児童に見えやすい場所に掲示しておくことで、習慣づけすることができる。

しかし、机の中の引き出し（お道具箱）の指導までしてしまう必要はあるのだろうか。教師が入れ方を指示すると、うまく入れられていない児童を見つけ、「全然入ってないじゃない！なんでそんなにぐちゃぐちゃなの！」と指導をしなくなってしまう。また、児童も「先生に言われたから」という理由だけで、自分の意志で片付けていないと思う。

机の上に引き出しを出し、物が増えた状態で、「どうすれば使いやすいか」を児童に考えさせることで、自分なりの片付け方を見つけることができると思う。児童それぞれの「使いやすさ」がきっとあるはずだ。

□ 提出物の出し方

プリントは、ここに入れます。連絡帳は、ここに入れます。
音読カードはここに入れます。……



かごに貼ってある写真と、同じものを出してね。

幼児教育施設では連絡帳を提出するところもあれば、出席シールを貼ってすぐにカバンに戻すところもある。「ここに入れましょう。」という指示だけでは、分かりにくいと思う。

そのためには視覚的な支援として、毎日出すものは、かごに写真を貼り、分かるようにしておく。かごの色を種類ごとの変えるのもよいと思う。

4月当初、提出するものが多い時は、事前に配布プリントを余分にもらっておき、提示することが有効だと考える。児童が難しいと感じることには、こまめに評価することで、身に付いていく。

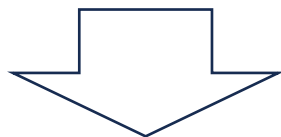
□ トイレの使い方

女の子

トイレに行くときは、スリッパに履き替えます。座ってするトイレ（洋式）としゃがんでするトイレ（和式）があります。しゃがんでするトイレは、丸くなっている方が前で、そこに近づいてしゃがみます。トイレットペーパーでお尻を拭いて、手で水を流します。終わったら、スリッパを揃えて脱いで、手を洗いましょう。

男の子

トイレに行くときは、スリッパに履き替えます。男の子は立ってするトイレがあります。便器に近づいて立ちます。便器の真ん中をねらっておしっこをしましょう。お尻を全部出さないようにしましょう。最後は必ず水を流します。終わったら、スリッパを揃えて脱いで、手を洗いましょう。



みんなが行ってた園と同じところや違うところはある？男の子と女の子が別だね。スリッパを履くのは同じ？スリッパを置くところに何か印があるね。これは何だろうね。

幼児教育施設では、男女同じトイレに入ります。小学校では男女別のトイレに入ることが伝える必要がある。個室の仕切りが高くなり、密室感があるのは大きな変化である。

男女別で使い方が違うが、ほとんどの児童はトイレの使い方を知っている。その経験から、これまでとの違いや同じところを聞き、児童に気付かせることで、使い方や小学校でのルールをより理解できると考える。

男子の小便器は比較的どの幼児教育施設でも見たことがあるので、使ったことがある児童がほとんどだ。大きな違いとしては、これまでズボンとパンツを全て下ろしていたのを、お尻が見えないようにすることを覚えてもらいたいことである。この部分は、園で

どのように教えられていたのかを先生方に尋ねてみるのもよいかもしれない。

児童の中から、「タオル掛けがない」という声上がるかもしれない。幼児教育施設では、手洗い場に自分のタオルを掛けておき、そこで手を拭くということを経験しているところもある。小学校では、タオル掛けはないので、それぞれがハンカチを持ってくる習慣に変化する。だから、ハンカチをポケットに入れておくということの必要性を児童に気付かせたい。

ズボンの下ろし方やタオル掛け、ハンカチについては、保育施設の先生方と情報を共有しておくといふと考える。

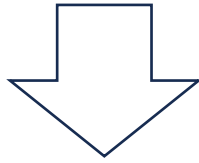
「授業中にトイレに行きたくなくなったら・・・」、「トイレに行くのが間に合わなかったら・・・」、などさまざまな不安を感じている児童がいるかもしれない。個別に声をかけることも大切だ。

例えば、「授業中にトイレに行きたくなくなったら、先生に言ってから行きましょう。」とただ伝えるのではなく、「なぜ先生に言うのか」を考える。よく入学後の保護者の方から、「授業中にトイレに行きたくなくなっても言えないかもしれません。」という話を聞く。児童にはトイレについて確認しているときに、「行きたくなくなったら行きたいと言ってよい」ということも伝えておくことが大切ではないかと考える。

□ 廊下・階段の歩き方

廊下は歩きます。走りません。廊下の真ん中に線が引いてありますよね。歩くときはその線よりも右側を歩きます。

階段は一段ずつ上り下りしましょう。足音を立てないように静かに歩きましょう。手すりですべったり、またがって遊んだりしません。危ないので、高いところからジャンプしません。



廊下や階段はどのように歩けばよいか分かりますか。でも、なんで歩かないといけないんだろうね。分かる人いますか？

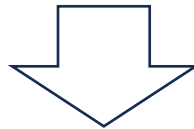
幼児教育施設では、廊下も階段も園児にとっては素敵な遊び場になる。たくさん遊びを見つけることができる場所だったが、小学生になると「危ないから」という理由で注意されることが多くなる。

そこで、児童にはまず、必ず守ってほしいことを伝え、何度か移動していく中で、危ないことや困ることを話し合っ、理解を促していくのがよいのではないかと考える。

1年生を担当したときに、「教室から特別教室への移動に時間がかかる」という理由で、できるだけ移動をさせないようにしていたことがあった。しかし、幼児教育施設では2階に自分たちの部屋があり、階段を使っているところもある。「時間がかかるから」という理由は教師が児童の力を信じ切れていなかったと、今は思う。子どもの経験を生かし、活動内容を充実させることが、本来教師の果たすべき役割なのではないだろうか。

□ チャイムの仕組み

チャイムは、勉強の始まりと終わりの合図です。チャイムが鳴ったら勉強が始まるので、それまでに必ず帰ってきましょう。



小学校では、チャイムが鳴りますね。チャイムは、勉強の始まりと終わりを教えてくれます。

「チャイム」というのは、小学校ならではのものである。幼児教育施設にはない。幼児教育施設では、保育者が時間の見通しを持ち、声をかけて部屋に戻ってくるように伝える場面がほとんどだ。

小学生になると、チャイムで行動することが当たり前になる。しかし、これは入学したての1年生にとっては当たり前の環境ではない。

まず、児童には「チャイム」とは何かを簡単に説明し、そのあとに、「チャイムが鳴ると、教室へ戻る」「チャイムが鳴ると、勉強が始まる」というのを経験させる。そうすることで、チャイムの大切さを理解することができると考える。

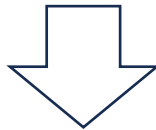
例えば、朝休みや20分休みに遊んでいて、放送が流れたりチャイムが鳴ったりすると、2～6年生は自然と教室へ戻っていく。その光景を見て、1年生は「戻らないといけない」ということを学ぶことができる。

また、「チャイムが鳴っても戻ってこない」という状況に出会うことがあると思う。「なんで戻ってこないの」と指導するのではなく、全員そろわないと授業を始めることができないとみんなが困ること、戻ってこないと心配で探しに行く必要があること等を伝え、「チャイムが鳴ったら戻ってこようね」と理由と共に理解できるように伝える。また、チャイムが鳴って戻ってこれたときにそのことを認め、小学生になってきていることへの自信をもてるようにすることも大切である。

またチャイムは、鳴る時間が決まっていることや全校がこのチャイムの合図で行動していることを伝えることも児童にとっては新しい気付きになるかもしれない。

□ 休み時間の過ごし方(20分休み・昼休み)

ボールは、使い方のきまりがあるので、まだ使ってはいけません。トランプやウノは雨の日にする遊びです。晴れている日は外に遊びに行きましょう。



休み時間、けがをしないように遊びましょう。分からないことがあったら、周りのお兄さんお姉さんに聞くと教えてもらえるかもしれませんよ。放送が流れたら片付けをして教室に戻ってきましょうね。

幼児教育施設では、自分たちでやりたい遊びを考え、時間いっぱい遊ぶことができる環境だった。

小学校は新年度が始まると、全学年で運動場や体育館の使い方などさまざまなルールを確認して指導する。低学年と高学年が同じサッカーゴールを使って、別々で遊んでいたら危ない。そのために、遊べる範囲を決めたり、使えるゴールを決めていたりする。

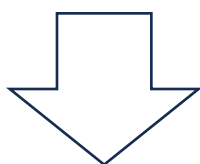
しかし、遊び始める前にたくさんのルールを伝えて、児童は思い切り楽しく遊べるだろうか。小学校に入学した途端、遊びの範囲がとても狭くなってしまう。どこにドッジボールコートがあるか、このサッカーゴールを使える学年はどこなのか、子どもたち同士で学んでも問題ないのではと考える。分からないことを知りたいと思い、学年を超えてやりとりする力を育むことが、主体的にものごとに関わろうとする子どもの姿につながるのではないだろうか。

また、トランプなどの室内遊びは、必ず雨の日のみなのだろうか。児童が過ごしたいと思った方法で過ごせるのが休み時間なのではないかと考える。

だから、「休み時間」の最低限のルールを示し、子どもたちに任せることも必要なのではと考える。

□ プrintの配り方・片付け方

Printは端と端を揃えて、半分に折ります。折ったら、それを連絡袋に入れます。連絡袋に入れたお手紙は家に帰ったら必ずお家の人に渡しましょう。



もらったPrintは、連絡袋に入るようにして入れてね。
持って帰ったら、お家の人に渡してね。

「Printを折る」という経験は多くの幼児教育施設で経験している。だから、一斉に折り方の指導をする必要はないと思う。連絡袋に入れて持ち帰る園もあれば、連絡帳に挟んで持ち帰る園もあるので、「連絡袋に入れる」という指示は必要かもしれない。

最初から折り方をきちんと指導して持ち帰らせるよりは、児童の経験を活用しながら、少しずつきれいな折り方を知っていけばよいのではと思う。もしくは「お家の人を読みやすいようにするにはどう折るのがいいかな」などと言添えるだけで、意識が変わるかもしれない。また、きれいに折りたたんでいる子どもの姿を教師が認める声をかけることで、他の子どもも気づき、自分もきれいに折って入れようとする姿が引き出されることもある。

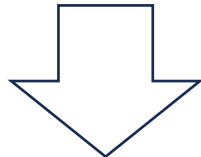
「Printの配り方」については、児童は初めて出会う場合が多い。先頭に座っている児童が先生から列の人数分受け取り、自分の分だけを取って、後ろの席の人に渡す、というのは少し難しいかもしれない。だから、Printを配るときについては、丁寧に指導するのがよいと思う。

さまざまな活動が始まったら・・・

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| ☐ 体操服の着替えについて | ☐ 日直の活動 |
| ☐ 掃除の仕方 | ☐ 避難訓練について |
| ☐ 給食当番 | |

□ 体操服の着替えについて

上の服から脱いで、脱いだものから畳みます。次に上の体操服を着て…



体操服に着替えます。着替えたものは畳んで、体操着入れに入れましょう。／机の上に置いておきましょう。

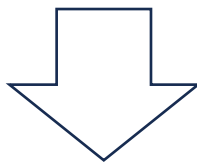
幼児教育施設で、着替えをするという経験はしている。それなのに、一から順序を説明する必要はないのではないだろうか。ある園では、一人一つずつ着替えを入れるかごが用意しており、その中に畳んで入れていた。また、着替えるときはござを敷き、その上で着替えていた。

小学校では、体操服入れに着てきた服を戻すことと、戻さずに机の上に置いておくことの違いがあると考えられる。だから、そのどちらかの指示をすることは必要だと思う。

中には、服を畳むことが苦手な児童もいると思う。そのような児童に対しては個別に対応することが有効であると思う。

□ 掃除の仕方

まず、全員掃除の時間はみんな雑巾をしてもらいます。
ほうきは先生がやりますね。



今までどんな掃除の仕方をしたことがありますか。ほうき、ぞうきん、ちりとり…

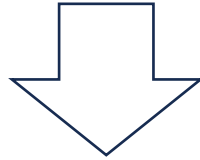
幼児教育施設を見てもみると、小さなほうきとちりとりを持って掃除をしていた。また、長いほうきを使って掃除している子もいた。

「ほうきの使い方を知らない」というのは教師の思い込みで、「ごみをうまく掃くことができない」なら、教師がフォローすればよいだけで、児童の活動の幅を狭めてしまっているということに気が付いた。

掃除はなぜするのか、きっと児童は分かっているはずだし、経験してきているはずだ。その経験を聞き、自分たちがこれまでにしてきたことを活かせるようにしていくことが大切だと考える。そして、教室がきれいになったことをみんなで喜び、その気持ちよさを感じることも大切にしたいところだ。

□ 給食当番

入れるの大変だから、先生が入れるので、当番さんは配ってください。(取りに来てください)



当番さんが運んできた食器やおかずをみんなで配ります。当番さんはお仕事をお願いします。

給食の配膳はとても時間がかかる。こぼしてしまうと、食べる分がなくなってしまう。いろいろなことを考えていると、教師がしてしまった方が早い、と考えてしまうのが当然だと考える。

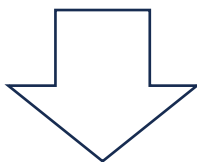
私が1年生を担当していた時は、取り分けることを経験させたのは3学期になったぐらいだった。しかし、園で給食を食べているところは、園児が自分で取り分けているところもあった。

最初は時間がかかるのは分かっていることだ。それに配慮して、児童ができることを活かし、次第に増やしていくことが大切なのではないだろうか。うまくできた経験も、ちょっとうまくいかなかった経験も、次に生きる経験である。がんばったことを認め、自信につなげていきたいものだ。

子どもたちの配膳をサポートするために、最初のころは担任とプラスしてもう一人教師がついてくれると安心して給食指導に当たることができるのではないかと考える。

□ 日直の活動

授業の始めと終わりは、あいさつをします。最初は先生が号令をかけますね。



みんな、日直やお当番のお仕事をしたことがありますか？
どんなお仕事をしていましたか？

幼児教育施設では、当番の仕事として、朝や給食のあいさつを園児が担当していた。また、職員室に行き、「プリントありますか」と声をかけ、配布用のプリントを取りにきたり、朝の放送をしたりしている園もあった。

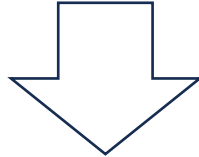
これまでは、「学校生活のリズムに慣れていないから」という理由で、号令を教師がかけ、慣れてきたら児童がするようにしていたことがあった。

「慣れていないから」と、こちらが決めてしまうのではなく、児童の経験したことを交流して、4月からできそうな内容を考えていくことも大切なかもしれない。

しかし、「日直」という言葉には初めて出会うかもしれない。「当番」という言葉を使っていたかもしれないので、その補足は必要ではないかと考える。

□ 避難訓練について

今日は避難訓練があります。避難訓練というのは……。もし、火事が起こった時は、ハンカチを口に当て



今日は避難訓練があります。火事が起こった時、どうすればいいか分かりますか？…

小学校では、年に4回程度、避難訓練の実施計画がされている。しかし、幼児教育施設は月に1度、避難訓練を行っているようだ。

4月の避難訓練は、避難経路を確認することが大きな目的とされている。そこに合わせて火事の時の避難の方法、「おはしも(て)」の確認を行う。とても丁寧に児童に分かるように教師は説明する。

けれど、児童は小学生になって初めて避難訓練をするわけではない。だから、児童に「火事の時は」「地震の時は」と尋ね、知っていることを交流することで主体的に訓練ができると考えられる。

小学校は教えることだらけではない

さまざまな場面を想定し、言い方や環境の工夫を例示しましたが、全てに言えるのは、「1年生は何も知らないわけではない」ということだ。幼児教育施設でたくさんの経験をし、学んできている。だから、まず全て教えようとするのではなく、児童にこれまでの経験を尋ねてみてほしい。そこから、知らないことは新しく学べばよいと思う。

また、園によってさまざまな違いもあると思う。その違いも認め合いながら、児童が安心できる言葉かけや環境づくりをしていきたい。